

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00150

研究課題名（和文）近年の中国における日本映画の受容とリメイクにみる日本のイメージの反転

研究課題名（英文）Reception of Japanese Films and Reversal of Japans Image in Their Remakes in China in Recent Years

研究代表者

劉 文兵（LIU, WENBING）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：70609958

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日中映画交流史を踏まえつつ、とりわけ近年の中国での日本映画の上映や活発化している日本映画のリメイクを考察することをつうじて、かつて中国人が抱く煌びやかな先進国の日本のイメージがノスタルジーの対象と化しつつあるという事象を明らかにした。そして、日中両国のパワーバランスの変化や中国人のメンタリティーの変容を、社会学のアプローチで解明するとともに、中国の観客のノスタルジーを喚起するオリジナルな作品をつくる代わりに、日本映画をリメイクしなければならない中国の映画人の思惑を、製作に携わる映画人への取材をつうじて明らかにした。さらに、今後の中国の文化構築に対して日本文化が果たす影響を示唆した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は近年の中国における日本映画の受容とリメイクを研究対象とし、大きな研究成果を挙げた。すなわち、著書4冊（そのうち、単著1冊、共著・分担執筆3冊）。論文5編。学会での研究発表3回。依頼講演3回。科研による国際シンポジウムの主催1回。さらに、計21名の日中映画の関係者に取材をおこない、貴重な映画史的証言を得た。日中両国のメディアにおいて研究成果を広く発信してきたのである。

研究成果の概要（英文）：Based on the history of cinematic exchanges between Japan and China, this study examined the screening of Japanese films and their increasingly popular remakes in China, especially in recent years. It was found that Chinese people's image of Japan as a splendidly developed country is becoming an object of nostalgia. While elucidating changes in the power balance between the two countries and the transformation of Chinese people's mentality from a sociological approach, through interviews with those involved in film production, the study revealed the thoughts of Chinese filmmakers who have to remake Japanese movies instead of creating original works that would evoke nostalgia in Chinese audiences. Furthermore, the study suggested how Japanese culture may impact the future development of Chinese culture.

研究分野：映画論、表象文化論

キーワード：日中映画交流史 日本コンテンツの海外輸出 日本のイメージ 日本漫画の実写化 中国での日本映画 上映 上海国際映画祭 北京国際映画祭 小市民意識

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

近年、中国で一般公開される日本映画は急増し、日本の映画や、TVドラマ、漫画、小説の映画化権を中国企業が買収する動きも活発化になっている。『家族はつらいよ』、『ナミヤ雑貨店の奇跡』、『深夜食堂』などがそれぞれ中国映画として製作され、両国で話題を呼んだ。これらの中国映画の製作には、多くの日本側スタッフやキャストが深くかかわってきた。2018年5月に日中間で共同製作の際の手続きを円滑化するために「日中映画共同制作協定」が調印されたことで、両国の共同製作はさらに活発化していくことが予想される。

そのなかで、両国映画のあいだに一種の「逆転」が起きている。すなわち、1970年代末から80年代にかけて、空前の日本映画ブームは中国全土を席卷し、『君よ憤怒の河を渉れ』(1976年)、『人間の証明』(1977年)などに描かれた、煌びやかな先進国の日本というイメージは中国国民に広く受容されていた。その一方、同時代の日本では中国第五世代監督の初期作品『黄色い大地』(1984年)や『紅いコーリャン』(1987年)が公開され、そのなかで描かれた近代化に立ち遅れている「プリミティブな中国」のイメージは、当時の日本人にとってノスタルジーの対象であった。

しかし、近年にいたると、中国では『となりのトトロ』(1988年)、『千と千尋の神隠し』(2001年)などの宮崎駿の旧作や、是枝裕和監督が手掛けた「家族もの」、日本映画のリメイクにあたる中国映画『家族はつらいよ』(2017年)、『ナミヤ雑貨店の奇跡』(2017年)、『深夜食堂』(2019年)が立て続き劇場公開され、これらの作品の根底に流れるファンタジックなユートピアのイメージ、あるいは素朴で美しい人間関係が、多くの中国人の郷愁を誘った。かつての華麗で豊かな「日本」は、いまや停滞感の漂うノスタルジーの対象と化した感は否めない。

これまで応募者は、日中映画交流の歴史、及び両国の相手国イメージの構築を主な研究テーマとし、多くの研究成果をあげてきた。拙著(単著)『中国10億人の日本映画熱愛史』(集英社、2006年)、『証言 日中映画人交流』(集英社、2011年)、『中国抗日映画・ドラマの世界』(祥伝社、2013年)、『日中映画交流史』(東京大学出版局、2016年)、『映画がつなぐ中国と日本』(東方書店、2018年)などはそれにあたる。しかし、これまでは日中映画交流のアクチュアルな状況に研究の焦点を向けることはほとんどなかった。また、応募者は2018年2月にユニジャパン・文化庁が共催した「日中国交正常化40周年記念映画上映会」のアドバイザー、そして、2018年10月29日に開催された「文化庁映画週間 日中映画共同製作シンポジウム」のモデレーターを務め、さらに2019年1月5日に北京で開催された「中国第一回国際映画シナリオ・フェスティバル」にパネリストとして日本映画シナリオ作家協会理事長加藤正人氏とともに招聘されるなどの経験から、日中映画交流の現状に強い関心を抱くようになった。

## 2. 研究の目的

かつて中国人にとって、煌びやかな先進国日本のイメージが、どのようなプロセスを経て、ノスタルジー、あるいはエキゾシズムの対象へと移り変わったのか。日本映画によって喚起されたノスタルジーの感情は、経済急成長を成し遂げた中国の人々にとってどのような機能を果たしているのか。そのイメージの背後にある資本や、マーケティング、政治がどのように機能しているのか。これらの映画システム内外に跨る問題を、映像に基づいた表象の歴史分析や、社会学、映画産業論、メディア論といった複眼的な視点から解明する。中国人が抱くアクチュアルな日本のイメージを浮き彫りにするとともに、今後の日中文化交流、ないし日中関係の方向性を示唆する。

### 3. 研究の方法

かつて中国人にとって、煌びやかな先進国日本のイメージが、どのようなプロセスを経て、ノスタルジー、あるいはエキゾシズムの対象へと移り変わったのか。日本映画によって喚起されたノスタルジーの感情は、経済急成長を成し遂げた中国の人々にとってどのような機能を果たしているのか。そのイメージの背後にある資本や、マーケティング、政治がどのように機能しているのか。これらの映画システム内外に跨る問題を、映像に基づいた表象の歴史分析や、社会学、映画産業論、メディア論といった複眼的な視点から解明する。中国人が抱くアクチュアルな日本のイメージを浮き彫りにするとともに、今後の日中文化交流、ないし日中関係の方向性を示唆する。

### 4. 研究成果

本研究は研究計画に沿って進め、大きな成果を挙げた。著書4冊(そのうち、単著1冊、共著・分担執筆3冊)、論文5編。学会での研究発表3回。依頼講演3回。科研による国際シンポジウムの主催1回。また、計21名の関係者に取材をおこなった。

時間軸に沿って具体的に説明していく。**初年度の2020年度**において「論考：岩井俊二監督作品は中国でどう見られてきたか」(夏目深雪編『岩井俊二「Love Letter」から「ラストレター」、そして「チファの手紙」へ』、河出書房新社、2020年)を執筆した。また、日中映画交流に携わった韓延監督(中国版『カイジ 賭博の黙示録』の実写版映画の監督)、佐藤東弥監督(日本版『カイジ』の実写版映画の監督)、柳島克己カメラマン(日本版『カイジ』の実写版映画のカメラマン)、周迅(岩井俊二が演出を手掛けた中国映画『チファの手紙』の主演女優)、黎涓(大林宣彦が演出を手掛けた日中合作映画『北京的西瓜』の主演女優)、高橋洋子(中国で大ヒットした『サンダ カン八番娼館』の主演女優)など、多くの映画人に取材を行い、貴重な映画史的証言を得た。日中が戦争状態になる前、日本映画が初めて中国で見られるようになった頃から、北野武や岩井俊二、是枝裕和等の作品や新海誠のアニメなど現代の作品が簡単に観られるようになった現在の状況も加えて、中国において日本映画がどのように受け入れられてきたのかを、本年度の研究を通じて検証した。その成果の一部は、2020年6月に(一財)福岡ユネスコ協会主催の講演会「日本映画は中国でどのように愛されてきたのか」において反映された。

**2021年度の主な業績**は、単著『日本の映画作家と中国 小津、溝口、黒澤明から岩井、是枝、宮崎駿まで』(弦書房、2021年6月)である。本書は中国側から見た日本の映画監督の系譜をたどることをつうじて、両国の映画交流の歴史を再構築する 点において独創性があった。また、共著『異文化社会の理解と表象研究』(専修大学出版局、2022年3月)において、第五章を担当し、福本伸行作漫画『カイジ』シリーズに基づいた日本版と中国版の実写映画の比較研究をおこなった。単著の学術論文「日本映画の受容にみる中国人の市民意識の変化 ネット時代の中国 社会の『小市民化』」(『専修大学社会科学研究所月報』695号、2021年5月)は、個人的な人間関係の中での生活を重視する「小市民意識」が芽生えはじめているという中国社会の現実を明らかにした。2021年6月1日日本映像学会アジア映画研究会において「日本映画の名監督と中国 近年の中国における日本映画の受容」をテーマに研究発表した。さらに2022年2月20日に科研費(基盤研究C・研究代表者)の助成のもと、日本国内外の研究者を招聘し、「国際シンポジウム 日本漫画の実写映画化」を主催し、自らも「越境するカイジ」をテーマに研究発表をおこなった。

**最終年度の2022年度**は日中国交正常化50周年の節目の年であることもあり、本研究を総括

しつつ、研究成果を、日中映画交流の歴史と関連付けながら、日中両国において広く発信することを心掛けてきた。論文「日中映画技術の交流の歩み」(大阪大学生産技術研究会へ編『生産と技術』2023年1月)、「日本の映画俳優と中国 国交正常化50周年の思い出」(東方書店『WEB 東方』、2022年11月)をそれぞれ日本のメディアをつうじて発表し、そして中国最大の理論誌『電影芸術』(2022年5月)において、映画評論家佐藤忠男と中国映画界のかかわりについての論考も発表したのである。また、日中両国の学会や研究機関において研究発表を三回ほどおこなってきた。すなわち、2022年5月に日本映像学会「映画ビジネス研究会」において「コロナ下の中国映画市場と、日本映画の上映」を主題とした研究発表をし、2022年11月16日に中山大學(中国広州)外国語学院主催第70期学術講演会において「日中映画交流の歴史と現状」をテーマに講演し、大きな反響を得た。さらに、中山大學と共催する国際シンポジウム「日本のコンテンツと中国」も企画中である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 劉文兵	4. 巻 695
2. 論文標題 日本映画の受容にみる中国人の市民意識の変化：ネット時代の中国社会の「小市民化」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 専修大学社会科学研究所月報 = The Monthly Bulletin of the Institute for Social Science Senshu University	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34360/00012298	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 劉文兵	4. 巻 8
2. 論文標題 大林宣彦監督との出会いは神様のお導きでした：『北京的西瓜』の女優・黎涓さんインタビュー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東方	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 劉文兵	4. 巻 12
2. 論文標題 日中戦争と映画 歴史表象とそのエンターテインメント性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日芸映画祭『中国を知る』パンフレット	6. 最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 劉文兵
2. 発表標題 日本映画の名監督と中国 近年の中国における日本映画の受容
3. 学会等名 日本映像学会アジア映画研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 劉文兵
2. 発表標題 越境する「カイジ」 福本伸行作漫画に基づいた日中の実写版映画に関する考察
3. 学会等名 基盤研究C(研究代表者:劉文兵)助成による主催(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 劉文兵
2. 発表標題 日本映画は中国でどのように愛されてきたのか
3. 学会等名 (一財)福岡ユネスコ協会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 劉文兵	4. 発行年 2021年
2. 出版社 弦書房	5. 総ページ数 104
3. 書名 日本の映画作家と中国	

1. 著者名 土屋昌明	4. 発行年 2022年
2. 出版社 専修大学出版局	5. 総ページ数 46
3. 書名 専修大学社会科学研究所 社会科学研究叢書24 異文化社会の理解と表象研究	

1. 著者名 夏目深雪編（劉文兵分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 7
3. 書名 岩井俊二 「Love Letter」から「ラストレター」、そして「チィファの手紙」へ	

1. 著者名 夏目深雪編（劉文兵分担執筆）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 4
3. 書名 岩井俊二 「Love Letter」から「ラストレター」、そして「チィファの手紙」へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「国際シンポジウム 日本漫画の実写映画化」についての報告 <a href="https://yuriyuriyuri1111sa.wixsite.com/my-site">https://yuriyuriyuri1111sa.wixsite.com/my-site</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム 日本漫画の実写映画化	開催年 2022年～2022年
-------------------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------